

ことにあるだろう。

ナジブは国内治安法 (ISA) で拘束されていた 13 人を釈放した。インド系の政治活動家が釈放されたことが注目された裏で、サバで大きな問題となっている身分証明証偽造の容疑がかけられた人々も釈放されている。ナジブは裁判なしに拘束できる ISA を見直すことを表明しており、今回の釈放もそれとあわせて歓迎されるべきことではある。ただし、もし身分証明証偽造が国家の安全に対する現実の脅威だと考えて ISA による拘束を行ったのであれば、捜査を進めて身分証明証偽造の仕組みを明らかにし、関係者を処罰するなどしてこの問題に適切に対応すべきだろう。もし今後そのような具体的な取り組みが見られなければ、今回の釈放は政治的パフォーマンスにすぎず、サバは弄ばれたという印象を与えることになりかねない。これは「1つのマレーシア」からさらに遠ざかることになる。

もう 1 つはメディア対策だ。ナジブは野党の機関誌の発禁処分を解いた。批判勢力を力づくで黙らせたとしても別の場所で噂が広まり、それを国民が受け入れるという時代の変化に対応して、メディアに寛容な態度を示すかわりにナジブに対する個人的な批判を抑えるという狙いがあるのだろう。しかし、メディアにとって政権批判は重要な役割の 1 つであり、ナジブに対する批判的な報道をなくすことはあり得ない。ナジブが個人的に抱える疑惑を解消しない限り、批判は繰り返されることだろう。それに対してナジブがどこまで対応できるかはわからない。

サバの人々に新政権への思いを尋ねると、多くの人から「ドリアンが落ちるのを待つ」という答えが返ってきた。ドリアンの実は、木に実っているときに食べると体を壊すので、木から落ちるのを待ってそれを食べろという暮らしの知恵から来た言

いまわしだが、好ましくない事態があっても拙速を避け、時が熟すのを待って、時が来たら行動に出るという意味で使われる。ナジブ政権は好ましくないが、次の総選挙まで待ち、そこで自分たちにできることをすると確認しあっている。ナジブには、その時まで「1つのマレーシア」を真の意味で具体化させるという課題が課せられている。

■2009.4.12 山本博之 (京都大学地域研究統合情報センター)

### 人事からみるナジブ新政権——ナジブはマハティールの影を振り払うことができるのか

ナジブの新首相就任を挟んで、マレーシアでは重要な政治イベントが目白押しであった。中でも、マレー人党 UMNO の党大会と党役員選挙、組閣、3 選挙区での補選は重要なイベントであった。3月の UMNO 党大会とナジブ新首相就任後の組閣について、一部の報道や、今やマレーシアでは重要なメディアとなったブログの世界では、大勢が事前の予想と違わず、「サプライズ」が少ないことを指摘する声があるが、これまでの UMNO 党人事と組閣の暗黙のルールからすると、無視できない傾向が表れている。

UMNO 党大会では党序列のトップの総裁は党役員選挙のルールによって無投票当選が決定した。党総裁が無投票当選するのは「UMNO の伝統」からするとまず順当な結果である。通常、マレーシアの UMNO 党役員選挙で注目すべきはナンバー3 の副総裁補の選挙である。3 人の議席を争う UMNO 副総裁補選挙で、注目すべきは得票数トップで当選したアフマド・ザヒド・ハミディである。ザヒドは 1998 年の UMNO 党大会当時、UMNO 青年部長として当時の首相 (UMNO 総裁) マハティール批判の先鞭をつけた。その後、党内の「若手」の声に押される形で

当時の副首相 (UMNO 副総裁) アンワルはマハティールと対決、その後、政府・与党から追放されたことはよく知られている。ザヒドはその際、国内治安法 (ISA) で逮捕され、失脚した。その後、アブドゥラ前政権下でザヒドはナジブとの良好な関係によって徐々に党・内閣内で復権していたが、漸く失脚前の失地を完全に回復したと言えるだろう。

組閣において注目すべきは副首相ムヒディン・ヤシンが教育大臣を兼任した点である。多民族国家マレーシアでは教育大臣は重要ポストで首相や副首相へのキャリア・パスの中で一度は経験しなければならない重要ポストである。だが、教育大臣就任は副首相に就く1つか2つ前のポストで、副首相が教育大臣を兼務したのは筆者の記憶だと独立前のトゥン・ラザク (後の第2代首相) を除いて他にはない。副首相はこれまで防衛、財務、内務といったポストを兼務してきた。その点から言えば、内務大臣に就任したヒシャムディン・フセイン (UMNO 党副総裁補) は次期リーダーの地歩を確実に進めたと言える。ムヒディンの教育大臣兼務は副首相に就任した後でトップ・リーダーが経験しているはずのポストを急遽割り当てた側面を否定できない。

UMNO と内閣の人事から見えるのは、UMNO を中心とする国民戦線体制はマハティール時代の90年代以降、舞台裏でひっそりと進行してきた長期低落傾向から脱却できていない点である。中でも1998年にアンワル一派を政府・党から追放した影響とその揺り戻しの混乱の中で次代のリーダーの発掘・育成に未だ問題を抱えていると言えよう。マハティールは未だマレーシア政治に間接的・構造的な影響を与えている。

もう1つは、より直接的なマハティールの影響

である。前述の UMNO 党役員選挙では青年部長にアブドゥラ前首相の娘婿のカイリ・ジャマルディンが当選した。これまでなら青年部長は閣内で何らかの大臣ポストを得るのが通常であったが、カイリには閣僚ポストが与えられなかった。一方でマハティールの息子で青年部長選挙で3位に終わったムクリズ・マハティールが国際通産副大臣として入閣した。この処遇について、党と政府の中でアブドゥラ前首相に近いグループが将来不満を持つ可能性がある。また、ムクリズの入閣により前政権下で批判を繰り返したマハティールを取り込んだ形になっているが、ナジブは構造改革を進める上でアブドゥラ前首相が失敗した党・政府の腐敗や大規模プロジェクト見直し等の「マハティールの負の遺産」に直面せざるを得ない。その際、老いたとはいえ、生来の批判者気質を持つマハティールがどのように動くかは予想できない。

ナジブの首相就任直後の4月7日に行われた3補選 (下院1議席、州議会2議席) では下院と州議会選挙区で野党が勝利し、与党が勝利したのは州議会の1選挙区のみだった。終わってみれば補選前と議席の改変は無かった訳だが、与党や政府系メディアが祝賀ムードを演出していた中で現状維持は、与党に対する逆風が依然として止んでいないことも感じさせる。ナジブに残された時間は少ない。ナジブが国民戦線体制を立て直し、次代の有望なリーダー層の発掘・育成にも手を付けることができるのか、注目である。

■2009.4.14 伊賀司 (神戸大学博士課程)

### ナジブ政権発足についての一般的所感

先日発足したナジブ政権の顔ぶれを眺めると、内政に関しては、経済問題にベテランを、国内諸問題には新顔を積極的に配置することによっ